

31-0841 W4-2

白檀の新規セスキテルペノイド成分 (2)

○金 兌勲¹, 伊東 秀之¹, 岡本 敬の介¹, 林 菊代², 長谷川 登志夫², 町口 孝久², 吉田 隆志¹ (¹岡山大学, ²埼玉大理)

【目的】我々は、インドやインドネシアなど東南アジア、オーストラリア、アフリカに自生する香木のビャクダン *Santalum album* L. (ビャクダン科) の成分研究を行っており、今までに新規サンタロール系セスキテルペン、リグナン類等計 7 種を見出し、それらの構造を報告してきた。今回、さらに成分精査を行い、3 種の新規化合物を単離し、構造解明を行うと共に、今までに単離した化合物の抗真菌作用についても検討を行ったので、それらの結果について報告する。

【方法および結果】白檀のメタノールエキスをヘキサンと酢酸エチル可溶部に分け、得られた各エキスについて、各種カラムクロマトグラフィーおよび分取 HPLC による分離、精製を繰り返し、ヘキサンエキスからは、主成分の α -Santalol (1) および新規化合物 (2) を含む 11 種の化合物を、また酢酸エチルエキスからもさらに 2 種の新規セスキテルペノイド (3), (4) を単離した。新規化合物の構造は、各種機器分析の結果に基づいて、それぞれ (2) ~ (4) 式で表されることを明らかにした。一方、paper disk 法による白癬菌に対する抗菌作用を検定した結果、単離したほとんどのセスキテルペノイドに活性が認められたが、なかでも 1 が最も強い抗真菌活性を示した。

